

1 研究テーマについて

昨年度の研究主題を受けて、本年度は「ともに学び合い、一人ひとりの考えを深める国語科学習の展開（2年次）ー子どもの関わりを促す支援の工夫ー」を主題として研究を進めている。

近年、単元構成を一つの型として捉えてしまう傾向が指摘されているところであるが、小豆支部（苗羽小学校）の実践では、単元の第一次の子どもの意識を大事にしたり、学習過程を子どもと共に考えたりする学習が展開されていた。子どもの意識に沿った授業づくりは、今後も大事にしたいところである。

2 対話について

● 誰と対話するのか

平成28年5月31日に出された「国語ワーキンググループにおける取りまとめ」の中に「国語科においては、この学び（自らの考えを広げ深めるための「対話的な学び」）の実現に向けて、例えば子供同士の対話に加え、子供と教師、子供と地域の人、本を通して本の作者や多様な資料などとの対話を図り」（p16）と書かれてある。つまり、対話というのは、身近な人からしだいに広がり、より多くの考えと出会い、そして自分の認識や思考を深めていくということが大事ではないかと思う。

● なぜ対話をするのか

① 言葉をつなぐため

対話というのは、自分と相手、人と人をつなぐことである。そこでは、自分の言葉と相手の言葉をつないで、自分の中で考え合わせることが大切になる。全国学力・学習状況調査でも言葉と言葉をつなぐことが苦手という結果が出ている。自分の中で大事にしたい言葉やここがおもしろそうだという考えをもってはいるが、それ以外にたくさんちりばめられている教材の中の言葉の価値には気付かないまま終わってしまう、ということはないだろうか。対話をすることでたくさんの言葉と出会い、自分の中に取り込むことができる。

高松支部（古高松小学校）は、人物と人物、場面と場面を関係付けるという学びを「リンクウィンドウ」という思考ツールを使って実現していた。思考ツールを用いてグループや全体で交流し、自分の考えと友達の考えとをつなぎながら、自分の気付いていないたくさんの言葉の価値やおもしろさと出合えるところに本実践の価値がある。

② 自分を客観視するために

「私はここが大好き」という子どもの気持ちを大切にすることは非常に大事なことだが、単元の最初に抱いた「私は、この物語のここが大好き」という読みが、単元が終わっても全く変わらなかったとしたら、学びの深まりという点で見直してみる必要がある。「自分はここが好き」という思いから一度離れ、もう一回文章に浸ってみる機会を保障する。自分の中だけで完結するのではなく、友達の多様な読みと出合うことが、読みの広がりや深まりをもたらす。

坂出・綾歌支部（羽床小学校）の提案では、「当初、『物語を作って2年生に読み聞かせをしたい』と言っていたが、物語が出来上がったら躊躇してしまった」という子どもたちの姿が挙げられていた。これは、子どもたちが相手意識をもっている姿だと考えられる。「早く読み聞かせをしたい」という姿はよく見られるが、本実践のように「長い話になってしまったから、2年生にはちょっと難しいのではないか」「2年生はいっぱい絵本を読んでいるから、僕の作ったものでは満足しないのではないか」という発言からは、本当に2年生の立場に立ち、自分の書いた文章を客観視できているということが分かる。相手意識をもった取組が展開されているところが評価できる。

③ 学級経営を支えるものとして

教師と子どもの一問一答で進んでしまうと、一部の子どもはついていけるが、そこからつながりを失ってしまう子もいる。教師と子どものつながり、子どもと子どものつながりをもてなかった子どもは、孤立に向かってしまいがちになる。以前、本研修会で講演された安彦忠彦先生は、「つながりを失うというのは今の教育というのが学力や能力を引き出すことばかりに目を向けてしまって、人と人以外の確かなものにかかわるという場を作り出してあげられなかったことが原因なのではないか」と言われていた。

高松支部（林小学校）の提案では、学習材を複数準備しておいた上で、子どもが選択するようにしたり、これまで読んできた教科書教材をモデルとしたりすることで、苦手意識を取り除き、「できた」という満足感へとつなぐようにしていた。このように、つながれない子どもに対し、教材や友達、自分自身の経験とのつながりを確保することも大事である。

3 終わりに —教師とのつながりについて「国語教育の創造」（野地潤家著）から—

教師とのつながりについて、香川県の引田小学校の 35 年前の先生の授業から、学級の子どもたちを育てるためには、たとえ間違えても周囲からの温かい支援が得られる学習の場を用意することが大切だと分かる。そうすれば、子どもは間違ってもくじけずに耐える力が育つのではないかと、また、先生の授業を明日も受けようと思えるのではないかと考えられる。香川県の授業づくりや、授業研究、授業力の高さというのは全国でも定評がある。そして子どもとのつながりにおいても、引田小学校の 35 年前の先生のようにすばらしい先人がいる。これを誇りに思いながら、これからの実践に取り組んでいってほしい。